

古代ギリシアの視点から

金子佳司

私たちにとって、「現代」は常に進行形である。つまり、それは常に未完結なのである。したがって、現代を知るために現代にだけ眼を向けていると、私たちの眼は常に出来事の後追いに終わらざるをえないのであり、結局、「現代」の全体像を見ることはできないのである。このことは当然のことであるにもかかわらず、世間一般でも学問の世界でも「最新」がもてはやされることが多い。流行からは最も距離を置くべき哲学の世界においてすら、「哲学の最前線」「哲学の前哨戦」などの言葉が飛び交うという始末である。

ところで、田中美知太郎氏が「古典教育雑感」⁽¹⁾という随筆の中で、歴史家トインビーのことに触れている。私自身はトインビーの経歴や学問的業績についてはよく知らないが、田中氏の文章などから知ったところによると、トインビーはオック

سفオード大学を卒業するまでもっぱらギリシア・ローマの古典教育を受け、その後も古代史研究に没頭していたのだそうである。ところが、その後、彼はイギリス外務省情報部に勤めたり、第一次世界大戦後のパリ講和会議において専門委員になったり、さらには、イギリス王立国際問題研究所の研究主任になり、当時の国際問題の研究をするなど、きわめて現代的な問題に取り組んだというのである。

なぜ彼は、もっぱら古典古代（ギリシア・ローマ）の研究をしてきた人物でありながら、そのようなきわめて現代的な問題に取り組むことができたのだろうか。その理由は、彼自身の「ギリシア・ローマ世界はひとつの全体として捉えることができる」という言葉から理解することができるだろう。というのは、たしかに古代史は、一つの文明がどのようにして発展し、どの

よつにして隆盛を迎え、どのよつにして衰退していったのかを、全体として私たちに教えてくれるからである。たぶんトインビーは、古代史研究によって歴史を全体として見る眼を養い、それによって、「現代」を全体としての歴史の中で的確に見据えることができるよつになったのである。さて、果たして私たちには、自分の生きている「現代」というものがどこまで見えているのだろうか。

近代以降、いわゆる近代的自我の発見によつて個人というものが自覚され、個人主義化が進んだ。そして、その個人はまずそれ自体で存在するものであつて、社会はそのような個人を基本的な構成単位としてできあがっているものだと考えられるよつになつた。

このような考えの背後には原子論があつたと思われる。すなわち、原子論によれば、原子とはそれ自体で存在している究極的な実体であり、宇宙はそのような原子とそれが運動する場である空虚からできているというのである。そして、この考えが個人と社会の関係にも適用されたと思われる。事実、「原子(atom)」の語源であるギリシア語 *atomos*(*atomon*) は「分割できないもの」(「は否定を表わす接頭語で、*tomos* は「分割する」を意味する *temno*(*temno*) に由来する) を意味し、「個人」(*individuum*) の語源であるラテン語 *individuum* も、同様に「分割できないもの」(*in* は否定を表わす接頭語で、*dividu* は「分割する」

を意味する *divisio* に由来する) を意味した。この原子論は、それが生まれた古代ギリシア⁽²⁾ では、当時のさまざまな理論の中の一つにすぎず、しかも、その当時の社会には大きな影響を及ぼすには至らなかったのである。ところが、その原子論が近代ヨーロッパに再び登場すると、たちまち広まり、いわゆる近代科学に決定的な影響を与え、まるでそれが唯一の理論であるかのごとく考えられるようになり、今日に至っているのである。さて、個人がそれ自体で存在するものだと考えられるようになると、価値判断の規準も個人に置かれるようになっていった。

たとえば、近代の初頭に位置するトマス・ホッブズ(一五八八・一六七九)は、社会の成立する以前の人間の自然状態というものを考え、その状態における個人の自己保存的欲求を満たすことを自然権だと考えた⁽³⁾。しかし、この状態のままでは個人と個人との欲求がぶつかりあつて戦争状態になる。そこで、人間は社会契約により国家権力(リヴァイアサン)というものを生み出し、それによって個人間の欲求を調整するようになったのだと彼は考えたのである。したがって、彼の考えによれば、政治とは個人間の欲求を調整するものであり、個人の私的な領域内のことそのものとは直接的には関係のないものである。そして、この考えは、紆余曲折を経ながらも、徐々に広まつて行つたのだと考えられる。

その後、ヨーロッパでは産業革命を経て資本主義が成立し、民主主義化も進展した。このうち、その一方の資本主義は財産

の私的所有を前提とする制度であり、この制度の背後には、個人が社会の基本的な構成単位であるという考えがあると思われる。そして、この私的所有ということは私たちが現代人にとって当然のことであるのだが、近代以前には必ずしもそうではなかった。少なくとも、財産の私的所有と蓄積を目的とすることには、倫理的な、あるいは宗教的な歯止めがあったと思われる。また、もう一方の民主主義も、それを現代人は優れた政治制度だと考え、また、そのように考えることを正当なことだと思っている。たとえば、ベルリンの壁が崩れて東ヨーロッパが民主化されることを無条件に喜ばしいことだと考え、社会主義に対する民主主義の勝利を手放しで喜んでいる⁽⁴⁾。しかし、これも、近代以前には必ずしもそうではなかった。

民主主義そのものが肯定的な評価を受けるようになるのは、十九世紀に入るころからだと思われるが、民主主義が目指す個人の政治的自由は、近代の初頭から正当化が試みられるようになっていた。もっとも自由の正当化そのものは古代ギリシアにおいてすでに試みられていたが、古代ギリシアの民主主義国家における自由と近代社会における自由とはその中味が異なる。古代においては、共同体の存在が前提された上で、そこに参加できることが自由であるのに対して、近代においては、前述のホッブズにおけるように、自由な個人の存在が前提された上で、その諸個人が互いに行える限り自由を他人によって侵害されないために、社会契約に基づいて国家という共同体をつくるのだ

と考えられたのである。因みに、ホッブズは国家を *Commonwealth* (共通利益体) と呼んだ。また、前述した、社会契約以前の自然状態において個人が持っていると言っていた自然権とは、要するに自由のことであった。このように、絶対主義者であり、君主政を理想としていたホッブズでさえ自由な個人の存在を前提にしていたのである。

このように、近代以降、政治の面でも経済の面でも自由な個人の存在が前提にされてきたのである。そして、このように個人主義化が進むと、人間の生き方の規範である倫理は、徐々に政治・経済社会の成立の前提である自由な個人の価値判断に委ねられるようになっていったと思われる。すなわち、生きることの価値や生きがいとは個人個人によって違って当然であり、したがって、それは個人が自由に決めることであり、その個人個人の価値の追求をできる限り可能にするための条件づくりが政治の役割であって、国家は個人の生き方の中身には立ち入るべきではないと考えられるようになってきたのである。こうして、個人主義化は政治と倫理の分離をもたらした。

しかし、個人主義化と、それによる財産の私的所有や民主主義の肯定、さらには、政治と倫理の分離も、歴史全体から見ると、ここ数世紀の間に起こってきた特殊なことなのである。果たして私たち現代人は、この現代の特殊性に気づいているのだろうか。前述した、個人主義の発想の元になっている原子論に対しては、古代ギリシアにおいてはさまざまな批判がなされ、

プラトンもアリストテレスも批判的であった。また、民主主義と言え、古代ギリシアがその発祥の地であるが、その古代ギリシアにおいて、たとえばプラトンは、民主政の社会では人間の欲望が放たれ、自由と平等は放埒と無差別という無秩序に陥ると考えた。もっとも、プラトンは墮落した民主社会に対して批判を加えているのだから、私たちは正しく自由と平等を実現できるような民主社会を作っていけば良いとも言えるが、いずれにしても、歴史的には民主主義は必ずしも評価されては来なかったのである。さらに、私たち現代人は、政治が個人の倫理に口出しすることを不当なことだと考えがちだが、たとえばアリストテレスにとつては、倫理と政治は一体のものだった⁽⁵⁾。彼の有名な言葉に「人間はポリスの動物である」があるが、この考えに基づけば、ポリス(国家社会)を離れた人間は本来の人間ではありえず、したがって、人間の倫理を考える場合には、国家社会の政治の問題と切り離しては考えられないのである。また、当然、このような考えからは、現代に見られるような個人主義そのものも生まれては来ない。果たして私たち現代人は、個人主義、民主主義、政治と倫理の分離ということ、無批判的に受け入れてはいないだろうか。

さて、もう一度、現代の状況の方に眼を向けて、特にその学問的状況について考えてみよう。一九七一年にジョン・ロールズが『正義論』を発表して以来、正義に関する議論が盛んに行なわれているが、それでも、個人と個人の利害を調整するため

の正義だけが問題とされ、善や幸福は問題とはされていない。つまり、善や幸福は個人の主観的判断に委ねられて、もはや学問的議論の対象とはされないのである。このような現象も近代以降の個人主義化の帰結の一つなのであろう。たしかに、自分の個人的な生き方を他人によって決められたり国家によって決められてしまうことは理不尽なことだとも言いうる。しかし、善や幸福は主観的なものにすぎないと言い切れるだろうか。ソクラテスは、疥癬(皮膚が痒くなる病気)の患者が皮膚を掻いていると快いからといって、皮膚を掻きながら一生を送り通すとしたら、その人は幸福な人生を送ったことになるだろうか、と言っている⁽⁶⁾。これは快樂主義に対する批判として言われているのだが、価値が主観的なものにすぎないという考え(主観主義・相対主義)に対する批判でもありうる。果たして価値というものは個人の主観の中で完結するものなのだろうか。価値に客観性はありえないのだろうか。

古代ギリシアでは、ソフィストと呼ばれる人々が、主観主義的・相対主義的価値観に基づいた議論を展開していた。その中でも最も有名なものは、プロタゴラスのいわゆる「人間尺度論」であろう。彼いわく、「あらゆる物事の尺度は人間である。あるものについては、それがあつた」といふこと、あらゆるものについては、それがあらぬといふことの尺度は人間である。すなわち、たとえば、ある人間が一本の花を見て「美しい(美しくある)」、と感じれば、その花は「美しい(美しくある)」のである。

り、別の人間がそれを見て「美しくない(美しくあらぬ)」と感じれば、その花は「美しくない(美しくあらぬ)」のである。つまり、それぞれの人間がどう感じるかが、あらゆる物事のあり方を決める規準(尺度)だと言つのである。そして、それぞれの人間が尺度である以上、人々に共通する規準はなく、より高い価値というものもありえないのである。価値の多様化、価値の多元化が主張される現代では、このような主張は抵抗なく受け入れられるのではないのだろうか。

しかし、そのような主張を認めると、たとえば裁判というものは成立しなくなる。なぜなら、犯罪を犯しても、その本人が自分は正しいと思えば、それは正しいということになり、いくら裁判官がそれを「正しくない」と判断しても、その判断が、犯罪を犯した人の「正しい」という判断よりもより妥当なものだという根拠がなくなるからである。つまり、さまざまな判断の中にも、より妥当な判断というものがあろうとしたら、その人たちが共有する判断規準というものがなければならぬのである。だからこそ、古代ギリシアでは、このような相対主義・主観主義に対して、ソクラテスやプラトンが盛んに反論したのである。果たして現代人は、価値は相対的なものにすぎないという考えを無批判的に受け入れてはいないだろうか。

私たち現代人は現代の考えに慣らされすぎて、現代人の考えの特殊性には気づかず、その考えを自明のことだと考えてしまっているかもしれない。しかし、現代人の考え方は、人類の

歴史全体から見ると、きわめて特殊な状態にあるかもしれないのである。現代人には、現代がその前提にしていることそのものはかえって見えないものである。個人主義という考えの特殊性もその一つであろう。

かつては多くの人間が、自分の足元にある地面が球体の一部であることには気づかず、平面であると思っていた。しかし、人類が地球を離れることができるようになり、宇宙船などから送られてくる地球全体の映像をすべての人が見ることができるようになった今日、私たちが日々その上を歩いている地面が球体の一部であることを疑う者はいないだろう。さて果たして、私たちの足元にあるこの「現代」という地面がどのような全体の一部であるかを私たちはしっかりと見つめていようだろうか。現代の問題を考えるためには、現代にだけ眼を向けて、現代のことに詳しくなるべきであって、現代を遠く離れた古代のことなど、一部の物好きに任せておけばいい、というような主張は果たして正しいだろうか。むしろ、現在、私たちが、過去にはなかったような現代に特有のさまざまな問題を抱えていながら、それらの問題の解決の方向すら見つけられず袋小路に入ってしまったているのも、私たちが現代を全体の中で見る眼を失っているからなのではないだろうか。

現代の問題を考えるには、現代的な思考の枠組みからいったん離れて、その離れた地点からその問題を眺めてみるということ

とが必要なのである。そして、そのような視点を私たちに与えてくれるのが古典である。この古典を学ぶには地味で根気のいる作業が伴うが、現代的な思考の枠組みという迷路から抜け出るためには、古典的教養は不可欠なのである。このような古典が与えてくれる視点を持つことなく、現代的な思考の枠組みの中でしかものを考えていない人たちの眼には、いつまでたっても「現代」は見えてこないであろう。少なくとも、私たちは、地味で根気のいる古典の勉強を免れるための言い訳に、「現代の最先端」とか「最新の～」などの言葉を使うべきではない。

註

(1) 『新潮』一九五九年（昭和三十四年）九月号。田中美知太郎全集（筑摩書房）第八巻所収。

(2) 原子論は、古代ギリシア人であるレウキッポスとデモクリトスによって、紀元前五世紀頃、考え出された。

(3) そもそも「社会化されない個人」という人間観は、人間の真のあり方を捉えているのだろうか。ホッブズの言う自然状態は、歴史上はいくら過去にさかのぼって見ても、どの時代にも存在してはいなかったものであり、いわば、彼の理論的シミュレーションの産物である。したがって、社会契約によって社会化される以前の、自然状態における人間とは、歴史上は存在しないのである。

人間は自我を持つことによって、個人としての自覚を持つようになるが、その自我が形成されてくる過程で、私たちは社会やその文化を吸収していくのではないだろうか。いずれにせよ、社会化される以前の人間というものが存在しないことは明らかである。

(4) 現代人は民主主義や自由主義を全体主義と対峙させて、一方を善、他方を悪と単純に考えがちである。しかし、現実には、たとえば、ナチス・ドイツの全体主義が民主主義の中から生れたように、全体主義と民主主義は必ずしも対極にあるものではないのである。だから、重要なのは、全体主義のどの点が悪いのか、また、民主主義や自由主義の善い点は何なのか、さらには、民主主義や自由主義の問題はないのかを考えることなのである。

(5) アリストテレスの倫理学書である『ニコマコス倫理学』の最後の箇所には、倫理の問題の考察が政治の問題の考察につながるべきものであることが述べられており、その箇所では考察されるべきだと主張されていた政治的な諸問題が、実際に、『政治学』において考察されている。

(6) プラトン『ゴルギアス』四九四C。